九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヘミングウェイ批評とその解釈コードについての一考察：”The Short Happy Life of Francis Macomber”の解釈を巡って

吉田，潤司

https://doi.org/10.15017/2332570

出版情報：文學研究. 89, pp.89-110, 1992-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ヘミングウェイ批評とその解釈コードについての一考察

"The Short Happy Life of Francis Macomber" の解釈を巡って

吉　田　潤　司

序章 —— 批評が持つ潜在的政治性

最近，これまでの伝統的な作品解釈の前提が反駁され，新しい解釈の可能性が出てきたため，ヘミングウェイ批評が，再び面白くなってきた。というのは，1990年に出版された Jackson J. Benson の新刊，*New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway* の冒頭での指摘にもあるように，近年の「理論」に対する関心の高まりとともに，ヘミングウェイ批評界においても批評家たちが方法論や各々の批評のアプローチ間の違いについて，あるいは批評作業のプロセスを哲学的に実証する事について注意を払うようになってきたからだ[1]。そうした現代的批評の思潮は，解釈の場で「作者」の果たす役割を再考しようとする態度，また，解釈とはコミュニケーションであるとする記号論的立場から分析の焦点を個々の文学作品から作品内で機能している文化的コードや習慣に移す態度，及びそうしたコードや習慣のもつイデオロギー性に着目する社会的文化的視座の獲得，そこから派生して自分の解釈の地平の相対化といったかたちで現れてきている。こうした一連の批評的態度の変化は，フェミニズム，マルキシズム，カルチュラルスタディーズといった大きな流れとなって表れてきており，「一時のファッションだ」と構えてはいられなくなってきた[2]。うっかり「普遍的真理」なんて言ったりすると「誰にとっての普遍

的真理なのか」と問い返される今日この頃である。

というわけで，「政治的批評の時代だ」と僕は考える[3]。

政治的行為としての，文学的テクストの解釈

さてここで，「一見すると無邪気で自然な」解釈にも，イデオロギー的側面がいかに備わっているか，を示す好例として，僕が生まれて初めて“The Short Happy Life of Francis Macomber”というテクストを読んだ時の印象を提示してみよう。そもそも僕が最初にこのテクストを読んだのは，10年近く前に遡る。中学3年の夏休みも終わりに近いある日，最後に残した読書感想文の宿題を片付けようとして僕はこの作品を読んだ。以下に，当時の僕の読みを要約してみた。

*　　*　　*

僕は，マコンバーと自分を同一化して読み，作品の後半で示される，臆病なマコンバーの，勇気を持った男への突然の変身に胸の透くような感動を覚えたのだった。そして，幸福の絶頂での彼の死を心から残念に思い，マーゴのような気が強く，身持ちの悪い女には気を付けようと考えた。そして，理想の男性としてのウィルソンに憧れ，自分もアフリカへ行き，ライオン狩りをしたいと思った。

*　　*　　*

以上のような僕の反応を，無邪気な，少年らしい読みとして一笑に付すことは，簡単に出来てしまう。ところが，ある程度の思考力と正義感を持って上記の反応について考察する場合，どうするだろう。この少年の意識のなかに既に浸透している社会的・文化的イデオロギーの力学を指摘するかもしれない。つまり，少年の読みは，イノセントではなく，男性中心的社会を現状のまま固定するイデオロギー的実践に加担する行為なのだ。なぜなら，ここで少年が彼の読みのマスター・ナラティヴとして依拠しているのは[4]，男性中心主義が生み

出した「男は男に生まれるのではない，男になるのである」というハードボイルド・マッチョのイニシエイション神話であるからだ。少年の，マコンバーのイニシエイションに自己を投影する読みは既に，「男は勇敢でなければいけない。また，女を支配できない男は一人前ではない」という慣習的に付与されてきた男性中心的イデオロギーを肯定している様に思える。その事はマコンバーへの自己投影が，「男は，わざわざ，臆病さと無縁のハードボイルドタイプの男にならなくても，単に男性に生まれるだけではどうしていけないのか？強い女性に従属する男がいてもいいじゃないか」という様なアンチ・ハードボイルドな言説を無視した空間でしか行なわれない事を想い浮かべれば，より明白になるだろう。もちろん当時の僕には，自分の解釈が持つ，こうしたイデオロギー的色彩に対する自覚はまるでなかった。

上述の僕の少年時代のマコンバー読書体験を敢えて議論の導入部として紹介した理由は，如何に素朴に見える解釈にも，見かけ以上に政治的要素が働いているという事実を明確にするためである。一般的に，解釈の文化コードや慣習は社会のなかで既に制度化されているのであまりにも自明の理として映るため，その制度の内にいる批評家が，自分の解釈はそれらの影響に依るものだと認識する事は極めて困難である。その結果，多くのヘミングウェイ批評家達も，文学テクストの解釈と称して，ある特定の制度化されている文化的コード（例えば男性中心主義のような，社会的文化的歴史的に優勢な階層のコード）のみを，説明不要な前提として絶対視してきた――このような批評的土壌は，由々しき事態であるけれど。

これまでのヘミングウェイ批評が男性中心主義寄りであった理由を考える時，批評家個人のイデオロギー性だけでなく，このテクスト自体が持つ歴史性にも注目する必要がある。1936年に発表されたこの作品は，当然，当時の男性中心社会の文化的コードとは無縁であり得ない。つまり，当時の社会が有した文化的ヘゲモニーがテクスト内で再生産されているわけだ。この論文では，個々の文学テクストのディスコースが当時の社会で支配的なイデオロギーや価値観と

強く結び付いている様子を綿密に再確認しようと考えている。

テクストに現れるイデオロギーや価値観について語る時，本来なら，ジェンダー，人種，階層などの様々な観点から相互補完的に議論すべきだろう。しかし，ここでは敢えてジェンダーに関する問題についてのみ議論を絞り，ヘミングウェイの短篇の中でも特にハードボイルド・マッチョ文化を顕著に表している，この "The Short Happy Life of Francis Macomber" には，1930年代当時の男性中心主義イデオロギー寄りのディスコースが顕著である点を指摘したい。同時に，これまで長い間，優勢だった批評的解釈が，このテクストの助長する男性中心主義的ディスコースによりかなり影響を受けている点を指摘したい。そうした議論の射程は，当然，批評家自身が共謀してある特定の歴史的社会的文化的な価値体系に基づく解釈を行ったのは　なぜ（誰の利益のために），いかにして（誰を排除しながら）なのかという言説をも巻き込むだろう。

第一章：　男性中心主義的なディスコース

この章では，まずテクストをイストワールとディスクールに分け，この物語のディスコースがかなり男性中心主義寄りである点を照射し，こうしたディスコース・レベルでの男性中心主義的視座のフェミニスト的視座に対するヘゲモニーが読者の反応にいかに影響（制限）を与えるか議論したい。

さて，テクスト内でイデオロギー的要素が顕著に作用するのは，イストワール（物語内容それ自体）の階段よりも，むしろディスクール（リプリゼンテイションの仕方）の段階だろう。ある核になる物語内容があったとして，それをどういう順序で，どのような前提の下で，どういう言葉を用いて，どういう視点で語るか，というディスクール・レベルでの選択は，常にあるイデオロギー的偏りによって決定付けられているからである。とにかく，以上の点を考慮しながらこの作品を解釈する時，僕たちはまず第一に，ディスクールが作用する以前の，マコンバーを取り巻く状況で起きた出来事の，通時的かつ論理的な配

列（イストワール）に目を向ける事から出発しなければならない。そこで初めて，この物語のイストワールが，現在我々が手にしているマコンバーの物語へと変型させられるプロセスで働いた「イデオロジカルな力」を照射するステップへ移れるだろう。では早速，この物語のイストワールを概観していこう。

フランシス・マコンバーが，綺麗で整った顔立ちの妻，マーゴと結婚したのは，11年前である。彼らは，離婚が騒がれながらも決して実際に別れない，夫婦だった。マコンバーにとっては妻のマーゴの美貌のため，マーゴにとってはマコンバーの巨額の富のため，お互いに離婚できないのだった。これまでに三度離婚の危機に直面したが，いつも執り繕ってきた。そして今回，4度目の危機に直面しながら，マコンバー夫妻はアフリカン・サファリへ旅立った。（ここまでがアフリカンサファリにやってくる以前の部分である）ある深夜，マコンバーはライオンの呻き声を耳にして怯える。次の朝ライオン狩りに行くが，あるライオンを手負いのまま逃がしてしまう。そのライオンが藪に逃げ込んたのでウイルソンと一緒に恐る恐るそのライオンを殺しにいく。しかし，マコンバーは手負いのライオンが跳び掛かってきた瞬間，恐れをなして遁走してしまい，ウィルソンにそのライオンを仕留めてもらう。こうしてマコンバーが意気地のないところを妻の目の前で暴露してしまった後，サファリは重苦しい雰囲気になる（これがテクストでは冒頭の箇所となっている）。その夜，マーゴはガイド役の狩猟家，ウィルソンと姦通し，マコンバーがその事で彼女を責めるが，彼女はマコンバー自身が旅を台無しにしたとして開き直っている（ここでも再びマコンバー夫妻の関係の危機というモチーフが繰り返される）。翌朝，フランシスはウィルソンに対し激しい憎悪を感じながら，水牛射ちに出かけるが，ある水牛を手負いにしてしまい，ライオンの時と同じようにまた藪に逃げられる。その水牛を追って藪に入ったマコンバーに水牛が突進してくる。しかし，彼は最後まで水牛に対し立ち向かおうとする。今まさに殺されるという瞬間に，マーゴがライフルを発射するとその弾丸は彼の後頭部に当たる（こうしてマコンバー夫妻の関係に終止符が打たれる）。その後ウィルソンは事後処理

の準備をしながらマーゴに非難を浴びせる。

上記のイストワールと，我々が物語として読むテクストとの比較により顕著な様に，このテクストは“story within a story”の物語構造を持っている。つまり，全体的な枠組みとして，経済的な男女差別に裏打ちされたマコンバー夫妻の結婚生活が腐敗し，倦怠したまま続きマコンバーの死により終結する物語があり，その枠の中に，マコンバーが「勇気」にたいして開眼するアフリカン・サファリでのイニシェイションの物語がある。これらふたつの物語は，修辞的に見ればフラッシュ・バックの手法によって織り合わされているが，テーマに関して言えば，二つのストーリーは全く独立させて別々のストーリーとして扱うこともできる程，かなり別個の異質なテーマを扱っている様だ[5]。この2つの異なるストーリーを織り合わせる時に，なんらかのイデオロギー的要素が働いたと仮定してみても，それほど強引なこじつけの議論ではないと思う。

実際，二つのストーリーのテクスト・レベルでの扱われ方に注目すると，イストワールにおいては枠内にあったイニシエイション・ストーリーがテクストでは大きく前景化（foreground）され，腐敗したマコンバー夫妻の動揺を巡るストーリーが後景化（background）されている事が判明する。この事はGennetの言う‘duration’の点から二つのプロットを比較すると，より明確になる[6]。例えば，イニシェイション・プロットにおいて重要な役割を果たすマコンバーとライオンが最初に対決する場面では，わずか数分ほどの出来事におけるライオンとマコンバー両方の心理状況を1ページ以上にわたり，詳細に描写している。それとは対照的に，マコンバー夫妻の危機を巡るプロットでは，過去3度に及ぶ離婚の危機を説明するのに，細かい心理描写を省いて“But they always made it up. They had a sound basis of union. Margot was too beautiful for Macomber to divorce her and Macomber had too much money for Margot ever to leave him.”[7] とだけしか描写されていない。こうした二つのプロットは，明らかに男性中心主義に都合の良い形で織り合わされている。なぜなら，ウィルソンとマコンバーが体現する「ハードボイ

ルド・マッチョのテーマ」が中心化され，強調される事により，そこでは，「男は男に生まれるのではなく，男になるのである。」というハードボイルド・マッチョのイニシェイション神話が巧みに構築・実在化されているからだ。

一見すれば，この神話自体は特に女性に不利に働くように見えないかもしれない。ところが実は，男性のイニシェイションというこの概念が曲者で，女性に不利な解釈を生む重要な鍵となっているのだ。というのは，マコンバーのイニシエイションのプロットが，残酷で掠奪的で不貞な悪妻の精神的虐待に対する反抗といったプロットと巧く重ね合わせられる事により，イニシエイションがもたらす結果――「男性（夫）が女性（妻）を抑圧・支配する男女関係」――が巧妙に当然化されてしまうからである。恐らく，多くの読者は悪妻マーゴには同情せず，逆にこれまで不幸な目に遭ってきた夫の支配権獲得を（不注意にも）快諾してしまうだろう。結局，イニシェイション・ストーリーは，男性支配を再確認する物語であると結論できる。

以上の様に男性中心主義に都合の良いプロットがテクスト内で中心化されている一方，倦怠と打算に満ちた上流階級の金銭ずくの結婚とその崩壊のプロットが周縁化されている。その結果，男性中心主義者に都合の良くない現実が巧妙にも排除され，目立ちにくくされている。そもそも，マコンバー夫妻により代表される上流階級の不毛な結婚というモチーフがその背後に暗示するのは，1930年代当時のアメリカ社会が結婚という社会制度を通じて女性を商品化していた文化的状況，言い換えれば，女性の社会的役割を性的対象物としての地位に固執させ，経済的自立を阻害していた「男性中心主義の社会構造」ではないだろうか。しかし，このテクスト――マコンバーのイニシェイションに大きく重点が置かれる一方，マーゴの度重なる浮気について，男性側の視点からのみ，しかもエピソデイックにしか語られていない――においては，女性の自立を阻む社会制度とそれに基づいた結婚が，批判の対象として描かれておらず，自明の前提として周辺的に扱われている。このためマーゴには同情が寄せられないので，彼女は嫌われ者のままで，その結果，第一に，読者の同情的関心が彼女

を抑圧している社会構造に向けられないし，第二に，悪妻に悩まされるマコンバーへの同情が増し，彼のイニシェイションを読者が賛美し，彼が妻に優位に立つこと（男性による女性支配）に歓喜するように設定されている。

第二章：　イニシェイション神話の脱神秘化

これまで述べてきた様に，このテクストにおいて男性のイニエイション神話構築は，実は男性による女性支配を当然化させるための方便として機能している。以下ではまずこの物語で中心化されている男性のイニシエイション神話の蓋然性を再検討し，それを脱構築していこう。

この物語が読者に対しその存在を信じることを前提とするところの，イニシエイションの瞬間とは，男性が一生に一度経験するかしないかの，「臆病」から脱して「勇気」を勝ち獲る瞬間である。ハードボイルド・マチズモの中心概念であるところの「勇気」を制度化し，神聖化するために，ヘミングウェイは猛獣狩りといったモチーフをここで登場させる。猛獣狩りは，死に対する恐怖を直視し，それを制御する「勇気」を必要とする行為であるので，自己の「勇気」を試し，具現化するには最適なモチーフだからであろう。まず，ヘミングウェイが，ウイルソンの内的独白のなかでイニシェイションの瞬間をどのように描写しているか，見てみよう。

"..., but regardless of how *it* had happened *it* had most certainly happened. ...Don't know what started *it*. But over now. ...He'd seen *it* in the war work the same way. More of a change than any loss of virginity. Fear gone like an operation. ...Main thing a man had. Made him into a man. Women knew *it* too." (32-33, italics mine)

ここでは，イニシェイションを名詞化することにより，また処女喪失に例えることにより，その真実性や実際性を強調しようとしている。名詞化し，物象化すれば，その存在は疑う必要のないものとして印象付けられる[8]。また，処女

から非処女への変化というは，慣習的に大きな意味を持つと考えられているので，男性のイニシェイションを云々する際に処女喪失を引き合いに出すことで，その実際性や意義の重大さが強調されている。

しかしながら，男性の「勇気」へのイニシエイション神話とは，政治的戦略と密接に絡み合った極めて人為的創造物（願望の結晶したもの）であると僕は強く主張したい。以下ではこのテクストでその神話が如何にして捏造されていくか，そのプロミスを暴いてみよう。

「勇気」へのイニシエイション神話が構築されるためには，まずそのイニシエイションの方向性（始点と終点）が，目に見える形で確定されなければならない。そこで，本来曖昧な境界線しかない「臆病/勇気」という二項対立の上に，徐々に色濃く人為的な境界線が引かれ，序列化が為されていく。例えば，「臆病」は，夫婦関係が崩壊する原因として描かれ[9]，次に女性に対する最悪の罵り言葉，“bitch”に相当する男性への罵り言葉として会話に登場し（pp. 22-23），極端に否定的，忌避すべき状態として描写されている。それと対照的に，「勇気」は夫婦関係を「正常に」（つまり男優位にという意味）しておくための安全弁としての役割を担わされる。また，男性の性的魅力の一要素とされている[10]——これらすべて恣意的な意味付けで根拠が無いものであるが。

既に明らかな様に，この物語のなかでは，繰り返し「臆病/勇気」といった対立項の境界が確定され，それぞれ強引に恣意的なマッチョ信仰とも言える価値付けがされていく。ところが本来は，「臆病/勇気」間の差異は，単なる個人の気分や心境に関する一時的であいまいな差異であるはずである。（ソマリ族の諺，またマコンバーの勇気が突如発生した憎悪の念により恐怖が大きく抑えられていた点）しかしながら，このテクストでは道徳的な価値判断を伴いながら，男性全体が「勇気」の有無により，イニシエイション前の「未だ男でない者」とイニシェイション後の「男」に分類されていく。こうした意味において，イニシエイション神話とは「男」という概念を再定義する戦略である点を見落としてはならない。つまり，本来は男性個人の性格的差異であったり，個人の

一時的感情に左右されがちな変動的差異であるもの（臆病/勇気）が，イニシエイションという概念を前提とするこの物語においては，男性一人一人の個人の成長過程での段階的差異へとすり替えられているのである。

そして，このすり替え作業に基づく男性のイニシェイション神話が，妻に虐げられた夫の反抗というプロットと巧く重ね合わせられる事により，男性による女性支配を容認するような意味が生じてくる。つまり，マコンバーの成長段階と彼の妻に対する力関係を要約すると，「未だ男でない」段階では，妻に優位に立たれているが，「一人前の男」になった段階では妻に対し優位に立っている，という図式になる。これにより，「(一人前でない男性は女性に支配されもするだろうが）本当の男は女性を支配する」といった男性中心主義的色彩が濃いインプリケイションが生じる[11]。これこそがイニシエイション・ストリーが読書に与える潜在的メッセージである。以上の観点から，前述の，恣意的な境界確定作業を基にしたイニシェイション神話は，男性中心主義者の利益の為に働いている事が明白になる。

第三章：　排除された歴史的社会的コンテクストの回復

以上，この物語のなかで中心テーマとされているイニシエイション神話に着目し，男性中心主義的コードの文化的ヘゲモニー維持を促進してきたその神話が実は根拠の無い代物である点を考察してきた。ここからは，この物語のなかで周縁化されてきたモチーフ，マコンバー夫妻に代表される上流階級の頽廃的で打算的な結婚とマーゴの浮気に着目し，その背景に潜む慣習的思考に焦点を当ててみよう――その思考とは，女性の社会的役割を制限し，文化的にも経済的にもマーゴ（女性一般）を抑制してきた1930年代のアメリカ社会の思考である。その後，「マーゴの姦通」について再考し，同時にマーゴを批判する行為に潜む政治性についても考えてみよう。そこではこれまでマーゴの姦通を一方的に非難してきた批評家は，言うなれば，男性中心主義的文化を踏み固める行

為に加担したことを詳しく説明したい。

さて，マコンバーという登場人物は，上流階級の男性の経済的権力を体現していると考えられる。その様に考えると彼のマーゴとの結婚は，経済的権力による，性的対象として商品化された女性の獲得として解釈できる。こうした解釈は，テクストの次の箇所にも示唆されている。

She [Margot] was an extremely handsome and well-kept woman of the beauty and social position which had, five years before, commanded five thousand dollars as the price of endorsing, with photograph, a beauty product *which she had never used.* She had been married to Francis Macomber for eleven years. (4, italics mine)

上に引用した，マーゴが化粧品の広告のモデルとして5000ドルを稼いだエピソードは，大いに注目に値する。一見するとこのエピソードは，彼女の美貌を印象付けるために挿入されたと解釈できる。しかし，彼女の美貌を示す例えとしてこのエピソードを挿入しただけなら，“which she had never used” という情報は不必要である。ナレーターはどうしてわざわざ「彼女が広告したのは，自分が一度も使ったことのない化粧品である」という情報を付け足したのだろう。つまり，マーゴットが彼女自身の性的魅力を活用して金銭的利益を得るため，個人的嗜好と矛盾する行動を執ったことがある事実をわざわざ提示するのは，なぜだろう。このエピソードの直後に唐突に，マコンバーとの11年に及ぶ結婚生活が並立されている事を考え合わせると，彼女がフランシスと結婚した理由が単に金銭的な理由によると暗示しているようにも思える。テクストの後の箇所で，この含意が，より明確になる。

They [Francis and Margot] had a sound basis of union. Margot was too beautiful for Macomber to divorce her and Macomber had too much money for Margot ever to leave him. (p. 22)

こうしてマーゴが金銭的理由からマコンバーを結婚相手に選んだという事実は，ナレーターにより読者に明示される。マーゴが広告出演によりモデルとし

て金銭を獲得するのと同じ様に，結婚を通じて金銭を獲得したというイメージが決定的になり，彼女の狡猾さが印象付けられる。結婚を神聖化する考えが支配的な文化の読者にとっては，このイメージだけでマーゴを嫌悪するに十分な理由が生まれるかもしれない。さらに姦通まで働くとあれば，彼女への批判が後を絶たないのも無理もない気がする。

こうした否定的描写の結果，これまでマーゴがいかに根強く嫌悪や非難の対象として読まれてきたかは，最近の批評史を概観しても，一目瞭然である。このストーリーに対する修正的読みは，大まかに，コード・ヒーローとしてのウィルソンの脱神話化とマーゴットが故意にマコンバーを殺害したという解釈の否定の二点に沿って行われてきたが[12]，マーゴットが犯した姦通の解釈に関しては，弁護の余地無しとして修正が行われないのが現状である。ヘミングウェイが彼女を最大級の“bitch”を下に描いた事については明らかになっている事だし[13]，姦通を犯し平気でいる彼女に同情的な解釈など無用なのだろうか。どうも僕には彼女個人を一方的に非難するのはテクストの戦略に，一杯喰わされてるような気がするのだが。そうした非難はあまりに「常識的」な判断であるため，その判断の前提を弁証法的に見直す視点が欠落しているようでどうも胡散臭いのだ。つまり，ここで肝要なのは，解釈と称してマーゴットが姦通を犯した事を非難するという行為は，男性中心主義的なイデオロギーの肯定とどう絡み合っているのか，なのだ。

上の質問に対する答えを説明する前段階として，結婚という個人的選択であるべき事柄に関してマーゴはなぜ，金銭的利害を第一義に決定しなければならなかったのかを，考察してみたい。マーゴが単に物質主義的で強欲だからと個人的性癖にのみ原因を帰着させると，見落とす要素が有ることを忘れてはならない。マーゴ個人の貪欲さから金銭的結婚に走ったと単純に断定してしまうと，社会の側にも彼女にそういった行動を執らせる要因が存在したという論理が抹消されてしまう。当時の社会的文化的イデオロギーに影響されて，マーゴの行動がある程度，規定（規制）されていたというのが僕の推論である。

論より証拠。ここで，当時のアメリカ社会の中で女性に与えられた機会・役割について把握するため，アメリカ女性の歴史書，*A History of Women in America* を参照してみよう。

"After the first World War the white-collar and service sector of the economy expanded rapidly....business could no longer count on a steady stream of new immigrants to fill their labor needs. Business turned to women, the largest available reserve of labor, and recruited them for work in new white-collar occupations."[14]

この記述を見るかぎりでは，1920年ごろに早くも女性に雇用機会が与えられていたという先進性が注目されるが，次のページにはその現状が証される。

"Women were offered and accepted lower pay than that given to men. They [women] were assigned the more routine, less responsible job, *while male clerks were promoted to new managerial positions. Male clerks were able to turn their specialties into professions,...*"

(304, italics mine)

つまり，第一次世界大戦後のアメリカ社会では，職を持つ女性の割合が増加したとはいえ，彼女達に与えられた仕事は，比較的収入の少ない「女性化された」仕事であり，そのため，経済的に女性が自立することは難しかった（"Office and sales work did not earn a woman a living wage any more than factory work had" (305).）。女性を雇いはしたが，それも結局は男性側の都合が良い形での雇用の仕方であり（上の引用のイタリック部分参照），女性を一段低い社会的地位——男性の所有物か，補佐役であり，決して対等の同僚ではない——に置くシステム自体は何ら改善されていない[15]。彼女達への抑圧は，経済的局面だけでない。なぜなら，たとえ経済的独立が達成された時点でさえ，女性が性的に活動的であると，非難されはしても，それが男性の場合のように自慢の種にはならないからだ。こうして社会・文化により経済的独立を阻止されていた当時の女性マーゴには，ウィルソンと同じように独身を続

けながら自由奔放な性生活を送る自由などは，始めから与えられていない。彼女に与えられた選択とは，男性（経済的保護者）と結婚して貞節な妻になるか，不貞な妻になるかという選択であるだろう。

以上の歴史的コンテクストから考慮するとマーゴの度重なる姦通行為の原因を，彼女個人にだけ求めるのは不公平な話で，もう少し彼女が当時置かれていた社会的コンテクストを考慮に入れる必要がある。つまり，結婚するにしても，マコンバーのように経済力を楯にして自分に有利な結婚を実現する手段など持たぬマーゴにとって，自分が希望・要求する性的魅力を備えたパートナーと結婚できる可能性は，当然低かったと判断できる。また，既に述べた通り，ウイルソンのように独身のまま奔放な性生活を楽しむ事は，経済的にも阻止されていた。こうした文化的状況の下にいたマーゴがマコンバーと結婚した場合，彼女が性的に欲求不満を抱えるようになる事はさほど不思議ではない。以上の様に考えると，彼女をマコンバー意外の男性との交渉へ走らせる原因は，女性を経済的にまた文化的に，性的抑圧へ逐い遣る社会のシステムに端を発していたと結論できそうだ。

以上の箇所では，マーゴを取り巻く社会的状況——テクストでは排除されてしまっている——が，如何に彼女にとって不利なものであるかについて議論してきた。しかし，この物語の読者に対しては，以上述べてきた女性一般の社会的文化的抑圧構造（＝マーゴの逆境）がテクストから「排除」されているため，どうしても彼女の姦通に関しては男性中心的な批判的意見しか出てこない様であった。

マーゴを批判的に読む男性中心主義姿勢をさらに助長した原因として，マーゴの浮気の被害者であるマコンバーの視点から姦通の事実が描写されていることが挙げられる。

It was now about three o'clock in the morning and Francis Macomber ... woke suddenly, frightened in a dream of the bloody-headed lion standing over him, and listening while his heart pounded, he realized that

his wife was not in the other cot in the tent. He lay awake with that knowledge for two hours.

At the end of that time his wife came into the tent, lifted her mosquito bar and crawled cozily into bed.

"Where have you been?" (22)

ベッドを抜け出しているマーゴにマコンバーが気付くこのシーンは，マコンバーの視点から描かれている。ここでは，マーゴの思考・心理は“cozily”という表現に僅かに顔を覗かせるだけである。読者自身もマコンバーと同じように帰って来るマーゴを待ち構える視点に置かれるため，マコンバーの肩を持ちながら読者は出来事を眺め，彼女の無責任さを追及する方向にかなりの程度操作されている。

この章の以上の箇所で僕が議論してきた通り，マーゴは少なくとも二つの点で物語構造から冷遇されているのだ。一つは，彼女への同情的解釈が発生しないようにするため，同情を引き起こしかねないサブテクストが排除されている点。もう一つは，視点の操作により，マコンバーに同情が寄せられ，彼女が非難を浴びるように仕組まれている点。読者が彼女に対し批判的であり続ける限り，彼女を欲求不満に追いやった社会の男性中心主義イデオロギーのシステムは照射されないので，男性中心主義は安泰である。こうした点からもこの物語のディスコースはかなり男性中心主義寄りであり，その感化を受けてきた読者は，暗黙の間に男性中心主義社会システムを絶対視し，マーゴに“bitch”というラベルを貼ってきた。

しかし，マーゴの犯す姦通により彼女を攻撃する際，僕たちはマーゴが社会的陥穽に填まっていた事を確認することを忘れてはならない。マーゴの経済的逆境を生み出した「女性に一定の役割（つまり男性の所有物か，せいぜい補佐役として）を押付ける類いの」文化的システムやイデオロギーが問題にされるべきであり，「社会の常識」として絶対化されている男性中心主義的イデオロギーを基準にして，その犠牲者であるマーゴ個人を裁き批判するのは，そうし

たイデオロギーを是認し，その現状維持を推し進める政治的行為に等しい。良識ある批評家としては，マーゴ個人をではなく，社会全体に蔓延していて認識しにくい性差別者的な文化システムを被告人席に立たせ，その欺瞞を暴くべきである。

こうした視点からマーゴとは，男性中心的な社会の文化的経済的システムに填まった犠牲者であるとして解釈できるのだ。しかし彼女は単に犠牲者であるだけでなく，男性中心主義体制の破壊者（彼女自身も男性中心主義イデオロギーに侵食されているが）としても解釈できる。その解釈は，これまで議論の的となってきた彼女のマコバー殺害をどういう意味でとらえるか，という問題と直結している。次の章では，作品最終場面の解釈の仕方を中心に議論した後，解釈という作業で表面化する文化コードの力学について考察し，テクスト批評の課題や目的について考えてみたい。

結論：マチズモ・コードの破壊者としてのマーゴ

従来，この作品の結末は，いつも議論の分かれる箇所であった。1939年にEdmund Wilsonがマーゴの殺意を認める見解を示して以来，多くの批評家が，マーゴを‘murderous bitch’として烙印してきた。1955年にWarren Beckがマーゴを弁護して彼女は偶然に夫を殺してしまったとする解釈を提示するとMark Spilkaがそれに対抗して彼女の殺意を主張した。マーゴの殺意の有無を巡って30年の年月にわたり論争となったが，彼女の殺意を主張する批評家のほうが多数を占めた[16]。これ迄これ程執拗にマーゴの殺意を信じた形での批評が行なわれてきた原因の一つに，ウィルソンの言葉を権威化する態度があったと僕は考える。特に彼がマコンバーのイニシェイションに興奮して思わず口にする“By my troth, I care not: a man can die but once ; we owe God a death and let it go which way it will, he that dies this year is quit for the next”という彼自身が信じる言葉が，実はヘミングウェイ自身が19歳

の頃から尊重してきた言葉であるだけに[17]，ウィルソンとヘミングウェイのイメージが重なってしまう。その結果，多くの批評家がウィルソンに作品の倫理的基準があると早合点したのだろう。

しかしテクストを綿密に読めば読むほど，思慮に欠けるウィルソンを‘satire’の対象として読むことのほうがむしろ自然に思えてくる[18]。いったんウィルソンの認識力の無さやマーゴへの偏見の強さに気付けば，マーゴが故意にマコンバーを射殺したというウィルソンの解釈は怪しいものに思えてくる。また最近では，ウィルソンはマーゴが偶然に誤ってマコンバーを殺害したことを最初から分かっていたのだが，彼自身の秘密をマーゴが暴露しないようにするため，脅迫の手段としてわざとマーゴを殺人者扱いしたのだという説得力のある解釈も出てきている[19]。どうやら，マーゴは故意に殺人を犯したのではないという意見のほうが理に適っていると言えそうだ。もしマーゴがマコンバーを殺したかったのなら，マーゴは自分の手を汚さなくても水牛がその仕事をしてくれたのだから[20]。更に物語の最終場面でのマーゴの発射した弾丸がマコンバーを射殺する瞬間の描写について分析してみると，マーゴには殺意は無かったという解釈のほうが自然に思えてくる。

“.. and Mrs. Macomber, in the car, had shot at the baffalo with the 6.5 Mannlicher as it seemed about to gore Macomber and had hit her husband about two inches up and a little to one side of the base of his skull.” (36)

ここで見落としてならないのは，Mrs. Macomber という主語に対する二つの述部が対照的に続いている点である。前半部では “seemed” という個人の主観を表わす表現が使われているが，この「今にもマコンバーを突き刺しそうだった」という判断はマーゴの思考と考えられる。こうして前半部は，マーゴの主観を示す‘free indirect speech’が顔を覗かせるが，後半部では具体的に詳細を述べた表現が目立ち，検死官の供述書を想わせる客観的状況説明の表現で書かれている。こうした文体的特徴を考慮すれば，マーゴ自身としては “shot

at the baffalo” のつもりが，現実には “hit her husband” という結果に終わってしまったと解釈できるだろう。こうしてマーゴの殺意を認める解釈が，実は疑わしいものである事が分かる。更にウィルソンの冷酷で執拗なマーゴ批判が，彼自身の秘密を守るための脅迫の手段である点を考え合わせると，物語の最後で読者の同情は，利己的なウィルソンに向けられるより，夫を必死で守ろうとして失敗したマーゴに対して向けられるだろう。

ところがマーゴが金銭的理由を第一義に結婚したことを思い出せば彼女がマコンバーを殺害して彼の財産を狙ったと考えることは不可能でもない。このように，このテクストは様々な読み方を同時に促しているように思える。本当のところ，単一の結論が出せないというのが，僕の結論である。マーゴがマコンバーを殺す心算でライフルの引金を引いたか否かという問いも確かに興味深いが，それより何倍も興味深いのは「なぜ批評家たちは，この曖昧なテクストを相手にマーゴの殺意を執拗に主張したがったのか？別の言い方をすれば，なぜ批評家たちは，マーゴの善意を否定したがったのか？」という問いである。とにかく，これは，単一の結論を絶対化するにはあまりにも両義的なテクストなのだ。そして，このマーゴのマコンバーに対する殺意の両義性，曖昧性こそ，解釈に値するのだ。以下では，マーゴの動機の曖昧性が男性批評家の解釈とって如何に不利な要素として働くかを簡潔に示したい。

もし，マーゴがマコンバーから離婚される以前に彼の財産を獲得しようとして彼を故意に殺害したのなら，その場合，彼女は大いに叱責されなければならない。しかし，もし彼女が愛する夫を守ろうとして必死でライフルを発射し，誤って殺したのであれば，結果はどうであれ，彼女の行為の動機は，勇気と愛情によるものであると解釈される。そこで今度は，マコンバーではなくマーゴこそが真の勇気の体現者として解釈されることになる。更に，このマーゴの自発的で勇気に満ちた有意義な行為によって，野性動物を不必要に殺すことで自らの勇気を証明しようとしてきた男性登場人物たちの愚劣さ，残酷さが揶揄されてしまうのだ。

以上の点から，マーゴがライフルを発射した動機が曖昧であり続ける限り，残酷で無意味な猛獣狩りなどで証明される男性たちのマチズモ・コードの正当性は常に転覆される可能性があり，男性中心主義は絶えず風刺される危機に曝されている。こうしてマーゴの殺意の有無を巡る曖昧性は，男性中心主義やイニシェイション神話の権威化を切り崩す様に働き続けるのだ。

どうやら，批評家たちがなぜマーゴの殺意の肯定に固執してきたのか，その理由が幾分見えてきたようである。マーゴの殺意を否定してしまうと，作品内の倫理基準が大きく移動し，ヘミングウェイのマチズモ・コードにひびが入るからではないのか。マーゴが急に善人になってしまうと，マチズモ・コードの文化圏にいる男性側の立場が無くなるからではないだろうか。

*　　*　　*

さてこの論文の締括りとして，論文の冒頭で述べた，文学作品を解釈するという行為の持つ政治性について考察してみよう。これまで見てきたように，このテクストを解釈する際に，各々の批評家は，自分たちに有利に働く文化的コードによつて作品の個々の要素の意味を解読し，「自分たちのためのテクスト」を紡いでいく。このテクストの場合，男性中心主義のイデオロギーが支配的な社会の文化的コードに基づく解釈がこれまで優勢であったが，Nina Baym の例にも見られるようにフェミニズムのコードでテクストから意味を生成する批評家もいる。たとえば，彼女の，ウィルソンの描写を再確認しようとする試みは，男性中心主義的解釈の矛盾を突くことに成功している。

テクスト解釈の場とは，異なった“cultural codes”の衝突しあう“battle-field”である[21]。それなのに，多くの伝統主義的批評家はそれらのコードがぶつかりあい，意味が生成される模様を詳細に眺めずして，テクストとは特定の（普遍的）コードによって覆われている統一体であると決め込んでいる。その結果，それぞれの批評家が，ある恣意的な単一の文化的コードによって解釈を行なっているのだ。それは言うなれば，作品の解釈と称してある単一の文化的コードを絶対化し，そのコードの支配を再確認し更新させるという，極めて政

治的な行為である。このように解釈の場が潜在的に持つ政治性を考慮すれば，次の事が言えそうである。批評家にとっていちばん必要とされているのは，自分が解釈の場で依拠している文化的コードをとりあえず相対化し，それ以外の文化的コードによる解釈と自分自身の解釈との関係性を見つめる視点を獲得することではないだろうか。

「そう偉そうな事を言っても，きみはフェミニズムの読みのほうが上だと密かに思っているんだろ」とおっしゃる方が居られるといけないので，最後に僕のスタンスを明確にしておきたい。ここまでの僕の議論が，現在横行している男性中心主義的解釈に対するカウンター・パンチとしての批評である性質上，フェミニズム寄りの解釈となったことは，ある意味で当然だと思っている。しかしながら，これまでの伝統的な男性中心イデオロギー寄りの解釈をすべて抹消して，こちらの側の解釈を押しつけるつもりは正直なところ全くない。例えば，これまでの批評家が解釈の拠り所としてマコンバーの変化を一種のイニシエーションと促える視点は無視出来ないと思うし，マーゴットを“bitch”とする視点は，ヘミングウェイ自身の言葉や意向を尊重しなくとも否定され得ないだろうからである。

もう一度繰り返すが，要は，お互いに解釈の基盤を相対化しつつ自らを疑うことにより，互いに排他的になる傾向にある（複数の）文化的価値の民主化を目指すことではないだろうか。そうした批評的態度を頭から拒む「萎縮した想像力」には，欺瞞に満ちた現在までのイデオロギー体制に疑問を投掛けないポーズを執ることによって，結局その維持に貢献する方向，文化的社会的にその体制に属さないだれかを排除していく方向，といった文化的ファシズムへの方向しか用意されていないのだ。こうした意味で，テクスト解釈—文化コードの戦場—において，ある一定のコードによる読みがなぜ他の読みよりも優先されるのかという考察は，文化的ファシズムに抗する戦いでもあるのだ。

註

1 Jackson J. Benson, ed., *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway* (Durham: Duke University Press, 1990), xiv-xv.

2 これまでのヒューマニズム批評の前提が如何に反駁されているかについてはPatrick Brantlinger, *Crusoe's Footprints* (New York : Routledge, 1990), 1-33. 参照。

3 この論文では「政治的」という語を「ある特定の社会的文化的階層のイデオロギーに有利に働く」という意味で使用している。

4 解釈とはある特定のマスター・ナラティヴに従い書き替える作業であるとする立場は，Fredric Jameson, Preface, *The Political Unconscious*, by Jameson (New York: Cornell UP, 1981) 9-10. から着想した。また，作品自体よりもその作品に関するこれまでの個々の解釈を批評の対象とする本論の基本的姿勢もJamesonに負うところが大きい。

5 片方は結婚という社会制度における対人関係のテーマであり，もう一方は男性個人が恐怖をどう克服するかという個人的なテーマである。

6 Gerald Gennet, *Narrative Discourse*, tr. Jane E. Lewin (Ithaca : Cornell Up, 1980), 86-112.

7 Ernest Hemingway, "The Short Happy Life of Francis Macomber" in *The Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Scribner's, 1966) 以下の引用はすべてこの版により，本文中に頁数を記載する。

8 名詞化された状況を不注意に信じず，実際にはどういう出来事が起こったのか各自が慎重に再構成する必要がある。更に詳しくはMichael J. Toolan, *Narrative : A Critical Linguistic Introduction*, Interface, (New York : Routledge, 1988), 234-236を参照。

9 マコンバーに約束を破って姦通を犯したことを攻撃された際，マーゴはその理由が臆病者である事を公にしたマコンバーの側に原因があるという趣旨で反論している。(p. 23)

10 マコンバーが怯えて逃げたライオンをウィルソンが射殺した後，急にマーゴは彼に興味を持ち始める。

11 もしマコンバーがイニシェイションを経験した後もまだマーゴに支配され続けるというプロットだったと仮定した場合，このテクストが暗示する程，男性中心主義的意味は生じないだろう。

12 Benson, 1990, p. 386.

13 Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (London: Simon and Schuster, 1987), 432.

14 Carol Hymowitz and Michaele Weissman, *A History of Women in America* (New York: Bantam, 1978), 303.

15 結局，Kate Millet の次の言葉に要約される通りである。
"This is so because our society, like all other historical civilization, is a patriarchy. The fact is evident at once if we recall that the military, industry, technology, universities, science, political office, and finance—in short, every avenue of power within the society, including the coercive force of the police, is entirely in male hand."
以上，Kate Millet, *Sexual Politics* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1970), 25.

16 Paul Smith, *A Readers Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway* (Boston: G.K. hall & Co., 1989), 336.

17 1942年に出版された戦争短編小説選集，*Men at War* の Introduction でも，この言葉を引用し，その言葉を "That was the best thing that is written in this book..." と高く評価している。

18 Virgill Hutton, "The Short Happy Life of Macomber" in *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*, ed.Jackson J. Benson (Durham: Duke UP, 1975), 239-50.

19 Nina Baym, "Actually, I Felt Sorry For the Lion" in *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*, ed. Jackson J. Benson (Durham: Duke University Press, 1990), 115.

20 K.G. Johnston, "In Defense of the Unhappy Margot Macomber," *Hemingway Review* 2 (1983): 46.

21 最近ではこうしたテクスト観が徐々に主流になりつつある。そうした状況を手軽に把握するには，Robert C. Allen, ed., *Channels of Discourse* (Chapel hill: University of North Carolina Press, 1987) と前述の Patrick Brantlinger, *Crusoe's Footprints* (New York: Routledge, 1990), 1-33.